

所属 01	所属名 名古屋	春岡小学校	トヨダ ショウヘイ 名前 豊 田 昇 平
分科会番号	特	分科会名	「特別の教科 道徳」特別分科会

1 研究題目

他者との関わりの中で自己の考えを再構成する道徳科の授業デザイン

2 研究のねらい

現代社会は、多様な考え方や生き方が共存し、唯一の正解が存在しない時代である。そのような社会の中で子どもたちには、自分なりの考えをもちながらも、他者の考えや感じ方に耳を傾け、自ら判断しながら生きていく力が求められる。

しかし、本学級の児童は、自己の考えを表現することに苦手意識をもつ児童が多く、授業中の発言は一部の児童に偏る傾向が見られる。また、友達の意見を聞くことはできるものの、その考えを基に自己の考えを見直したり、問い直したりする姿は十分には見られない。さらに、教材の出来事を自分自身の生活や経験と結び付けて考えることが少なく、「先生が求める答えは何だろう」と正解を探そうとする姿も見られる。

私は、このような実態から、児童に必要なことは、自己の考えをただ発表する機会ではなく、他者との対話を通して異なる考えに出会い、自己の考えを見直しながら、考えをつくり直していく経験であると考えた。そこで私は、他者との関わりの中で自己の考えを見直し、自分なりのよりよい生き方について考え続けることができる児童を育てたい。

道徳科は、価値を一方向的に教え込む教科ではない。教材に描かれた人物の生き方や思いを通して、「自分ならどうするか」「なぜそう考えるのか」を問い続け、自己の生き方についての考えを深める教科である。そのためには、まず自分なりの考えを形成し、それを基に他者と関わりながら多様な見方や考え方に触れることが重要である。そして、他者との対話によって、自分の考えを広げたり、付け加えたり、見直したりすることができるようにする。このような過程を、本研究では「自己の考えの再構成」と捉える。

そこで本研究では、考えを可視化し、児童の交流に生かすための「心の種」を活用した授業をデザインする。教材に描かれた人物が、そのような考え方や生き方をすることができるのは、「心の種」を成長させているからだとして捉え、自分のもつ「心の種」と比較したり、他者との対話を通してその考えを比較・検討しながら見直したりさせる。さらに、授業の終末では、自分が育てたい心の種と向き合う場を設定する。

本研究を通して、児童が、他者との関わりの中で自己の考えを再構成し、自己の生き方について考えを深めることのできる道徳科の授業デザインを明らかにしたい。

3 昨年度の実践（対象：5年生 24名）

主題 明るい心で 教材名 このままでいいのかな （A 正直、誠実）



（１）ねらい

周囲の勢いに流され、正しいことを言えない「わたし」の姿などを通して、明るい心で生活するには、どう考え、どんな心を成長させる必要があるかを考えさせ、自分自身に誠実であろうとする心情を育てる。

（２）具体的な手立て

- ① 学びを自分ごとにさせるために、事前に「サッカーをしていて、ハンドでゴール。誰も気付いていない中で、あなたは正直に言うか」というアンケートを行った。授業の導入で、アンケート結果を共有し、全体の考えを深掘りしながら、自分に正直でいることへの自分なりの考えを自覚させた。
- ② 児童同士に交流させる場面では、交流したことを可視化させるために、「わたし（主人公）が自分に正直で、明るい心でいられるためには、どんな『心の種』を育てる必要がありますか」と発問し「心の種」を記述させた。
- ③ 児童が自らの心と向き合うことができるように、自分が育てたい心の種を選択する場面を設定した。

（３）実践の様子 T：教師 C：児童

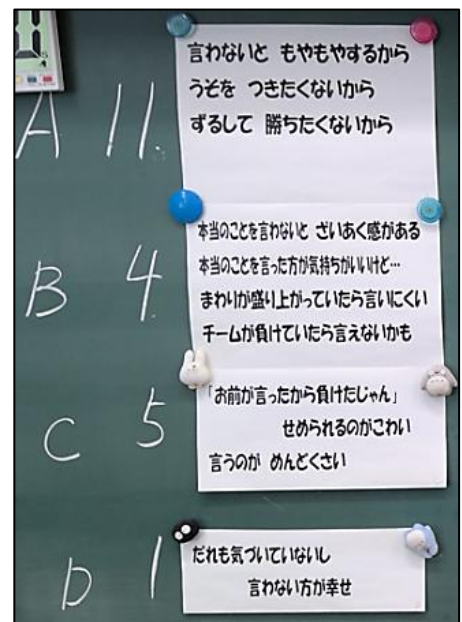
1 アンケート結果を知る

T：アンケート結果を見てみましょう。（右資料）

A「絶対に本当のことを言うと思う」を選んだ人は、11人いました。言わないともやもやすると考えているようです。 **B**「たぶん本当のことを言うと思う」を選んだ人は、4人いました。

T：実は、この話は実話です。クローゼ選手は、正直に言うよさを、知っていたのでしょうね。

T：今日は、自分に正直でいるために必要な心について考えてみましょう。



アンケート結果と児童の考え

2 教材から考える

T：どうして「わたし」は「ぎりぎりイン」とってしまったのでしょうか。

C : けんかになったらいやだから。 C : 圧に負けたから。

C : 友達関係を壊したくないから。 C : 責められるのがこわいから。

C：七海のプライドを傷つけないから。

T：友達関係は壊れなかったし、責められなかったから、心は晴れやかで、このあとの試合も主人公は楽しめたでしょうね。

C: いや、もやもやしている。

T：では、わたし（主人公）が自分に正直で、
 明るいい心でいられるためには、どんな『心
 の種』を育てる必要がありますか。

C：勇気の種。 C：圧に負けない種。



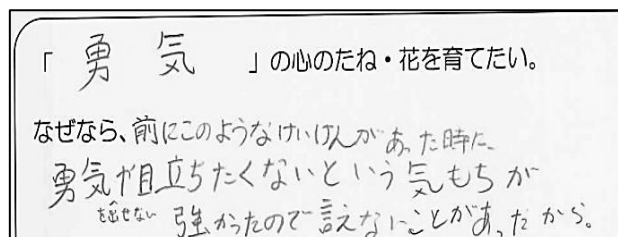
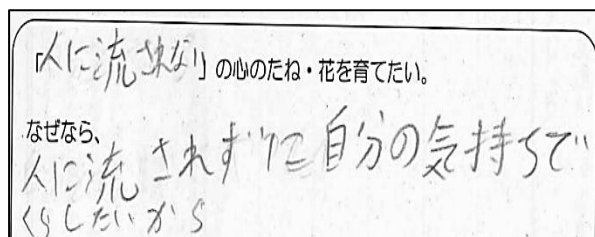
児童が考えた「心の種」

3 自分の心と向き合う場面

T：あなたが、自分に正直で、明るい心でいられるためには、どの「心の種」を育てたいですか。

C:「**勇気の心の種**」を育てたい。

C：「自分の心を信じる心の種」を育てたい。



児童のワークシートの記述

(4) 成果と課題

- 事前アンケートによって、児童が「自分ならどうするか」と学習課題を自分ごととしてとらえ、関心をもって学びに向かう姿が見られた。
- 対話する場面では、友達の意見に触れる中で、新たな価値を見出すことができた。
- 児童が、自らに必要な心を選択することで、「勇気の心を育てたい」「まわりに流されずに正直でいたい」など、成長させたい心と向き合うことができた。
- 「心の種」を思いっただけ書いてよいこととしたため、個人作業に集中してしまい、対話が単なる「自分の意見の発表・伝達」に留まり、「共に考えを深める（再構成する）」場にならない児童もいた。
- 授業内で「心の種」を選ぶことはできたが、その後の日常の行動や意識へのつながりが十分ではなかった。

4 今年度の研究の方法

(1) 研究の対象

名古屋市立春岡小学校 5年1組 26名

(2) 研究の手立て

① 自分ごととして考える場の設定

自己の考えを再構成するためには、もともとの自分の考えをもっている必要がある。また、児童が「考えたい」「考える必要がある」と感じ、自分ごととして学習に取り組ませる必要もある。そのために、自分の立場を明確にする活動を取り入れ、自分の考えを自覚させる。

② 他者との対話によって考えを見つめ直す場の設定

対話が単なる「自分の意見の発表・伝達」に留まり、「共に考えを深める（再構成する）」場にならなかったことを踏まえて、対話の「焦点化」を図る。選択肢や数値（割合）など、考えのズレが生まれる工夫を取り入れる。教材の価値を理解するだけでなく、登場人物がその行動を起こすことができたのは、どんな心が必要かといった対話を行う場面を設定する。児童は他者との対話を通して、自己の考えを再構成していく。

③ 自分の心と向き合う場の設定

日常の行動や意識へのつながりが十分ではなかったことを踏まえて、単に種を選ぶだけでなく、「その種にどのように栄養を与えるか（日常での具体的行動）」まで考えを深める。対話を通して再構成した考えをもとに、自分自身の「心の種」の育て方（行動）を考えさせ、今後の自己の生き方へとつなげる。

5 第1次実践

主 題 夢をかなえるために (A 希望と勇気、努力と強い意志)

教材名 夢を実現するためには



野球選手の大谷翔平選手は、小学3年生の頃からプロ野球選手になる夢をもち続けた。

大谷翔平選手									
体力	精神力	集中力	持久力	柔軟性	協調性	コミュニケーション能力	リーダーシップ	責任感	誠実さ
体力	精神力	集中力	持久力	柔軟性	協調性	コミュニケーション能力	リーダーシップ	責任感	誠実さ
体力	精神力	集中力	持久力	柔軟性	協調性	コミュニケーション能力	リーダーシップ	責任感	誠実さ
体力	精神力	集中力	持久力	柔軟性	協調性	コミュニケーション能力	リーダーシップ	責任感	誠実さ
体力	精神力	集中力	持久力	柔軟性	協調性	コミュニケーション能力	リーダーシップ	責任感	誠実さ
体力	精神力	集中力	持久力	柔軟性	協調性	コミュニケーション能力	リーダーシップ	責任感	誠実さ
体力	精神力	集中力	持久力	柔軟性	協調性	コミュニケーション能力	リーダーシップ	責任感	誠実さ
体力	精神力	集中力	持久力	柔軟性	協調性	コミュニケーション能力	リーダーシップ	責任感	誠実さ
体力	精神力	集中力	持久力	柔軟性	協調性	コミュニケーション能力	リーダーシップ	責任感	誠実さ
体力	精神力	集中力	持久力	柔軟性	協調性	コミュニケーション能力	リーダーシップ	責任感	誠実さ

大谷選手の高校では、夢や目標をかなえるために何をすべきかを具体的に書き込む「目標達成シート」を作成していた。

大谷選手は、常に目標を明確にし、その目標に向かって今何をすべきかを具体的に考えて行動する。

(1) ねらい

大谷選手の生き方を通して、困難があっても夢や目標をあきらめず、強い意志を持って主体的に努力を積み重ねようとする実践意欲を育てる。

(2) 具体的な手立て

① 自分ごととして考える場の設定

事前に、大谷選手のすごいと思ったところを尋ね、アンケートを行うことで、学びを自分ごととして捉えさせる。また、自分の「あきらめずにやり抜く意志の心の種」の現状（種のまま／芽が出ている／花が咲いている）を自覚させる。

② 他者との対話によって考えを見つめ直す場の設定

あきらめずにやり抜くための動機として「**A**：自分のための栄養（負けたくない・夢を叶えたい）」と「**B**：誰かのための栄養（感謝・支えてくれる人のため）」の二つの視点を提示する。大谷選手がどのように努力を継続できたのか、その「栄養の割合（%）」をグループで議論させる。

③ 自分の心と向き合う場の設定

対話を通して「自分・他者の両方の視点が大切だ」と気づいた上で、自分自身の「あきらめずにやり抜く意志の種」を育てるために、日常でどのような栄養（具体的行動）をあげていくかをワークシートに記述させる。

(3) 実践の様子 T：教師 C：児童

1 自分ごととして考える場の設定

T：大谷選手のすごいところはどこだと思いますか。

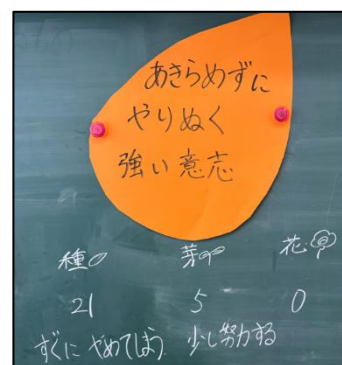
C：あきらめないところ。C：目標をやり抜いたところ。C：意志が強い。

T：大谷選手は「あきらめずにやり抜く強い意志の種」をすごく立派に成長させたんだね。

T：みんなの種はどうですか？種のまま？芽が出ている？花が咲いている？

C：わたしは種のままです。C：ぼくは、芽くらいは出ていると思います。

T：今日は、「あきらめずにやり抜く強い意志の種」を育てるヒントを探してみましょう。



2 他者との対話によって考えを見つめ直す場の設定

児童に示した「心の種」

T：ここに栄養が2種類あります。

A：自分のための栄養（誰にも負けたくないなど、自分の気持ちを高める）

B：誰かのための栄養（支えてくれた人への気持ちを高める）です。大谷選手は、どちらの栄養をたくさん使ったと思いますか。

C：**A**だと思う。自分のために頑張る気持ちがないと165キロは出せないと思う。

C：**B**だと思う。目標達成シートに「感謝」と書いてある。

T：どちらも大事ということですね。大谷選手は、どちらかだけでなく、両方あげていたのでしょうか。

T：では、**A**と**B**どのような配分であげていたと思いますか。グループで考えてみましょう。

C : A 4 5 % B 5 5 %。自分の力だけではプロにはなれない。応援してくれた人がたくさんいるはず。

C : A 4 0 % B 6 0 %。Aが強すぎると、自分ばかりだなと思われてしまう。

C : A 5 0 % B 5 0 %。あきらめなかったのは自分だから。でも、周りのサポートは大切。

3 自分の心と向き合う場の設定

T : 「あきらめずにやり抜く強い意志の種」を成長させるヒントは、見つかりましたか。みなさんの種をもっと大きく成長させるために、これからどうしますか。

C : 自分には厳しく、他人にはやさしくしたいです。

C : 自分のための栄養と、誰かのための栄養を 5 0 % ずつコツコツあげたいです。

C : バレーの試合で点差がはなれても、あきらめない。

わたしの「あきらめずにやり抜く強い意志という心のタネ」は
今、(タネ ・ 芽 ・ つぼみ ・ 花) の状態です。
やりたくなくてもしやうにやることを、いりたかじやない
しここからまんつくりすると芽とがにづけるかも
たからいやすにやることをしうと思った。

わたしの「あきらめずにやり抜く強い意志という心のタネ」は
今、(タネ ・ 芽 ・ つぼみ ・ 花) の状態です。
めんどうさでも何事もチャレンジしてやりぬく
気持ちにする

児童のワークシートの記述

(4) 成果と課題

- 二つの視点を示し、割合の数値を決める作業が「考えのズレ」を生み出し、「友達はどうしてその配分にしたのだろう」という対話への必然性を生み出すことができた。
- 他者の意見を単に聞き流すのではなく、「自分と異なる割合」の根拠を聞くことで、自分の最初の考え方が揺さぶられた。その結果、他者の視点を取り入れて自分の考えを再構成する姿が見られた。
- 授業の終末では、「大谷選手のようにになりたい」という憧れで終わるのではなく、「習い事や部活動でどうするか」「嫌なことがあった時にどんな栄養をあげるか」という具体的な行動まで落とし込んで考えることができた。
- 一部の児童において、数値を決めること自体が目的化してしまい、「なぜその栄養が必要なのか」というねらいについての考えが、浅くなってしまう場面が見られた。
- 対話によって自分の考えを再構成したにもかかわらず、児童自身が「友達との対話によって自分の考えがどう広がり、どう変わったのか」を自覚・振り返る場が十分に確保できていなかった。「対話の前と後で自分の考え方がどう変わったか」ということを客観的に捉え直す振り返りの発問を検討する必要がある。